

the People

元気なまちには 元気な主張を続け
元気に行動する 市民がいる

the people (ザ・ピープル)
2013年 7月発行

発行：特定非営利活動法人 ザ・ピープル
代表者：吉田 恵美子
所在地：福島県いわき市小名浜字蛭川南5-6
タウンモールリスポ内
TEL：0246-52-2511 FAX：38-9538
E-mail：the-people@email.plala.or.jp
URL：http://www.iwaki-j.com/people/

ふくしま オーガニックコットン プロジェクト 夏

いわきで育つコットンにとって2年目の夏がやってきました。昨年は例年のない少雨と猛暑に悩まされましたが、今年は打って変わって雨の多い天候で、海岸沿いでは霧がかかる日が多く低温の心配も出ています。発芽率が伸び悩み、7月に入っても補植作業に追われてきました。加えて、病害虫の出方も昨年と比べて多いようです。農業の厳しさを痛感しながらのコットン栽培が続いています。

栽培面積が昨年の倍近くに広がったことで、栽培管理で専従スタッフにかかる負担は大きくなっています。そうした状況の中で、頑張ってくれているのがNPO法人ETICから1年間の期限付きで派遣されている「右腕」の矢口拓也君、永山翔君の二人です。二人は農業に関しては全くの素人ながら、日々の活動の中で周囲の農業者から様々なアドバイスをもらいつつ、毎週末に首都圏からおいで下さる100人近くのボランティアの皆さんの対応を行っています。

震災から2年4か月が経過した今、震災体験の風化が進んでいるといわれています。しかし、コットンプロジェクトにおいて下さるボランティアの方は、変わらずにいわきに心を寄せ、度々おいで下さる方もおられます。共にコットンを育てるという行為に加わってくださっているということで、緩やかな仲間意識が生まれているように思います。震災は大きなダメージではありますが、こうして新たな人のつながりを生んだことで、地域にもたらしたものもあるのです。



震災から2年4か月が経過した今、震災体験の風化が進んでいるといわれています。しかし、コットンプロジェクトにおいて下さるボランティアの方は、変わらずにいわきに心を寄せ、度々おいで下さる方もおられます。共にコットンを育てるという行為に加わってくださっているということで、緩やかな仲間意識が生まれているように思います。震災は大きなダメージではありますが、こうして新たな人のつながりを生んだことで、地域にもたらしたものもあるのです。



6月22日には、昨年収穫されたいわき産のコットンが入ったTシャツが完成して私たちの手元に戻ってきたことを祝うお披露目セレモニーが催されました。昨年は収量が思うように上がらず、コットンペイブ製作にも使用してしまったため、実際にTシャツに含まれるいわき産コットンはほんの僅かになってしまいました。それでも、茶綿が入ったことでほんのり薄茶色になったTシャツが手元に届く日を、私たちは首を長くして待っていました。



セレモニーでは、このプロジェクトのスタートから支援をいただいているNPO法人JKSKや今年の栽培を応援して下さっている味の素冷凍食品株式会社からご来賓の臨席を頂き、昨年からの栽培に加わってくれている市立久之浜第一小学校の児童の皆さんにTシャツを着てもらってのお披露目となりました。セレモニーの最中に雨が降り出すアクシデントはありましたが、栽培に協力くださっている農業者の方たちを始め、地域の方やボランティアの方にもお集まりいただき、和やかなセレモニーとなりました。終了後には参加者全員で手作りのカレーに舌鼓を打ち、できたばかりのTシャツを買い求めて下さる方が多数おられました。

Tシャツの販売に関しては、昨年度の「いわきおてんとSUN プロジェクト」（総務省「緑の分権改革調査研究事業」）実施の中から今年2月に生まれた、いわきおてんとSUN企業組合が中心になって進めていくことになりました。NPO法人ザ・ピープルのコットンプロジェクトを応援して下さっている皆様の中には、企業組合での販売に戸惑いを覚える方もおられるのではないのでしょうか。この企業組合は、NPO法人でどうしても保持しきれないビジネス性を確実なものにするために、組織されました。Tシャツの販売のほかにも、「市民コミュニティ電力事業」「市民の力での復興を学ぶスタディツアー事業」等が企業組合の事業として展開されていきます。昨年度、3NPO法人がコンソーシアムを組む形で始まった取り組みが、新たな仕組みを生み出し、着実性を増していこうとしています。一方が膨らむことで一方が萎んでしまっは何にもなりません。この仕組み自体も新たなチャレンジなのです。ぜひ、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

■いわきおてんとSUN企業組合

代表理事 吉田恵美子
事務局 〒972-8321 福島県いわき市常磐湯本町三函208 古滝屋内2F
TEL兼FAX 0246-43-3532
HP：http://www.iwaki-otentosun.jp/
mail：iwaki.otentosun@gmail.com

つぶやき

コットンの耕作地が双葉郡広野町に広がったため、現地に行く機会が多くなった。夏休みに入ると、野原に立寄った。蕎麦畑が白く、折木に咲いていた。蕎麦畑が白く、花が一面に咲いていた。水田には青々とした稲が太陽を浴びて光り、優しい風が吹いていた。延々と広がる田んぼを見ながら「秋には沢山のお米が取れるんだ」と話している葉が出た。そのとき孫の口から「ここに住みたいな」と。綺麗だね、目を細め遠くを眺める孫の顔を私はじまじと見た。そして幼い子供の目に綺麗だと映った広野町の情景について、初めて見つけたおてんとSUN。▼広野町は震災直後、全町民が避難したため2年間、農地の耕作が出来なかった。昨年、私はオガニックコットン栽培について、父の実家の方々に勧めたい思いもあって、度々足を運んだ。いわき市から広野町に入るや途端に車窓の風景が一変。この町の色の違い、この境界はいったい何だか、うと不思議な感情を抱きながら走った。とを思い出した。今年は耕作が可能となり、田んぼの青さが目に染みるほど美しいと思いがながら走った。▼昨年、物悲しい光景が頭から離れない。美しさが際立つのも少し寂しい。▼と、今、57年、常磐線広野駅の構内に、ある歌碑が建立された。♪今は山中今は浜、今は鉄橋わたるぞと、思う間もなくトンネルの闇を通って広野原へ私はこの歌が好きで、普段でもよく口ずさんでいる。鉄道員だった父と一緒に汽車に乗るや、一回りよく見てみるよ」と小学生の私に向かってくれた。▼この歌の説明をしてくれたいものだ。そうしたこともあってか、いま首都圏から農業支援や被災地見学に来て下さる方々を案内する際、広野町が近くと下手な歌で申し訳ないのだが、どうしてもこの歌を紹介してしまおう。▼ご存知のようにこの歌は文部省唱歌「汽車」である。広野町が舞台であることに異論を唱える地方もあるというけれど、常磐線に実際に乗り込み、久ノ浜駅から広野町駅にかけての風景を見渡せば納得する筈である。▼さてこの後、孫との会話は続いた。「どうして住みたいの?」「だって遊びまくれるもん、これにはさすがに笑ってしまった。考えてみると原発事故の影響を受け線量が下がらず、体育祭を屋内で開催したり、プールが利用できる。等々、未だ外で遊べない子供達のことや報じられている。孫の場合そうした状況下にいるわけでは無いけれど、全ての子供たちが大地を駆けめぐり、どこでも遊びまくれる、安心の日々と環境を取り戻してあげたいものだと思う。そして緑豊かな広い野原を、一生ふるさとと誇れる福島県民でありたいと呟いた私である。